童話の部
優秀賞

第38回 日産 童話と絵本のグランプリ

お姉ちゃんの不思議なクレヨン

やぎ みいこ

お姉ちゃんのクレヨンは不思議なクレヨン。このクレヨンで絵をかくと、なんでも本物そっくりになるのだ。

「まずはリンゴ」

お姉ちゃんは赤いクレヨンを手に取ると、画用紙にリンゴの絵をかいた。すると絵のリンゴがふわりと浮かびあがり、本物そっくりのまるいリンゴになった。

「お次はバナナだよ」

今度は黄色いクレヨンでバナナの絵をかくと、またまた本物みたいなバナナになった。

「次は、次は？」

わたしがせかすとお姉ちゃんは「うふふ」と笑ってむらさき色のクレヨンを取り、まるいつぶがたくさんついた大きなブドウの絵をかいた。

ブドウの次はメロン。その次はモモ。部屋中がくだものでいっぱいになると、わたしたちは、くだもの屋さんごっこをして遊んだ。

わたしがかいたんじゃだめ。このクレヨンは、お姉ちゃんがかかないと本物みたいにならないのだ。

ある日、わたしとお姉ちゃんがリビングでテレビを見ていると、お父さんが長い棒みたいなものを持ってきた。

「二人におみやげだよ。すごいだろう」

棒は、くるくるっと巻かれた大きな紙だった。お父さんに「ありがとう」を言ってから、二人でほどいてみると、リビングでは全部広げられないほど大きかった。

「お姉ちゃん、庭で広げようよ」

わたしが言うとお姉ちゃんは、

「いいアイデアだね」

と言って、紙をもとのように巻きなおした。

大きなのり巻きみたいになった紙を、二人で「よいしょっ」と持ちあげて、まげないように注意しながら外に持っていった。

庭の芝生の上でいっぱいに広げると、芝生が全部かくれてしまった。やっぱりすごく大きい。

くつをぬいで紙の上に乗っかると、お姉ちゃんが聞いてきた。

「何をかこうか？」

「家にしようよ」

「オッケー」

お姉ちゃんは茶色いクレヨンで、まず最初に、紙いっぱいの大きな四角をかいた。

「この四角の中を線でくぎって、キッチンとか部屋にするんだよ」

「家の広告みたいに？」

「うん」

なんだか、わくわくしてきた。

お姉ちゃんは、まず大きな四角を二つに分けた。大きな部屋が二個できた。その内の一個のかどに、はい色のクレヨンで小さな丸が二つついた横長の四角をかいた。

「お姉ちゃん、それなに？」

「ガスコンロ。この丸のとこでお湯をわかすんだよ」

「なるほど」

「で、となりがシンクでこっちは冷蔵庫」

シンクには、じゃ口や水を流すところをつけたけど、冷蔵庫はただの四角。

キッチンが終わるとまた茶色い線でくぎり、新しい部屋をつくる。その部屋のまん中に大きなこげ茶色の丸をかいた。

「お姉ちゃん、それなに？」

「ごはんを食べるテーブルだよ。ここはごはんを食べる部屋」

「丸いの？アニメにでてくるのみたいだね」

「ちゃぶ台っていうんだよ。この部屋は畳の部屋にしようっと」

言いながら緑色で床をかるくぬりつぶし、終わると部屋のすみに黒い長四角をかいた。

「これはテレビ。ちょっと小さいかな？」

お姉ちゃんはテレビの四角を少し長くかき足した。

「お姉ちゃん、子ども部屋もかこうよ」

「ちょっと待ってね。先にお風呂と洗面所をかいちゃうから」

お湯をためる湯ぶねをかいて、洗い場にはシャワーもつける。お風呂場のとなりが洗面所。手を洗う所もつけなくちゃ。その下を細長いろう下にして、ろう下の下を二つに分けた。一個はお母さんたちの部屋で、もう一個が子ども部屋。それぞれの部屋にベッドやタンス、本箱なんかをかいて、

「できた！」

お姉ちゃんは笑いながらわたしを見た。

「お姉ちゃん、玄関がないよ」

「あ、やばい、やばい」

お風呂をちょっとけずって玄関をつくり、こんどこそ完成だ。

二人でいっしょに紙から下りた。すると、お姉ちゃんがかいたクレヨンの線がにゅーっと浮かびあがり、茶色いかべができた。最後にかいた玄関には、小さなドアがついている。

「わあ、家になった。でも屋根がない

ねえ」
　わたしが言うとお姉ちゃんは、「屋根を取って、上から見た絵だからねえ」と残念そうに言った。でも、本物みたい。わたしたちは玄関のドアを開けて中に入った。
　くつをぬいでろう下へあがると、すぐに子ども部屋の入り口がある。中をのぞくとベッドや本箱がちゃんとあった。お姉ちゃんのかいたとおりだ。
　ろう下をまっすぐいくと、そのままキッチンに入った。右がわは畳の部屋だ。
「あ、ちゃぶ台だ！」
　わたしはちゃぶ台にかけよって座ってみた。目の前には大型テレビ。
　お姉ちゃんはキッチンでじゃ口をひねっている。じゃーっと水が出る音がした。
「ここで、おままごとしようか」
　わたしが「うん」と言うと、お姉ちゃんは本当の家へもどっていった。ちゃぶ台で待っていると、画用紙を持ったお姉ちゃんが、すぐにもどってきた。
「まずは、おなべとおたま。それから、お茶わん、おわん。お皿におはし」
　ちゃぶ台の上に画用紙を広げて、お姉ちゃんがクレヨンでかくと、次々に食器が出てきた。
「お姉ちゃん、食べものもかいて」
「オッケー」
「おざぶとんも」
「オッケー」
　わたしが言うと、お姉ちゃんはどんどんかいてくれるので、家の中はあっという間に、色々なものでいっぱいになった。ずっとここに住めそうなくらいだ。
　ひと通りそろったところで、おままごとのはじまり、はじまり。
　最初はわたしが子どもで、お姉ちゃんがお母さん役だ。
「朝ですよ。起きなさい」
　子ども部屋のベッドでねていると、お母さん役のお姉ちゃんが起こしにきた。
「まだ、ねむいよ」
「だめですよ、今日は学校でしょ」
　畳の部屋へ行くと、ちゃぶ台の上にごはんと目玉焼きがあった。
「わあ、本当に食べられそう」
　お姉ちゃんが、本物のお母さんみたいにおなべを持って入ってきた。
「はやく食べちゃいなさい。遅刻するわよ」
「それなに？」
　わたしがおなべをさすと、ホカホカの湯気がたったおみそしるが出てきた。
「お父さんは？」
「大阪へ出張よ。お帰りは明日ですって」
「へええ」
　ごはんをせっせと食べるまねをしていたら、なんだかトイレに行きたくなってきた。
「ねえ、お姉ちゃん。トイレって、どこだっけ？」
「あ！トイレかくの、わすれた」
　わたしは、急いで本当の家へもどった。

　その後も、二人で楽しく遊んでいたけれど、だんだん夕方になってきた。
「二人とも、そろそろ家に入りなさい」
　本物のお母さんが、本当の家から出てきた。庭に干してあった洗濯物を取り込みにきたのだ。お母さんは洗濯物を全部家の中に入れると、わたしたちの家にやってきた。
「まあ、ずいぶんと大きな家をかいたのね」
　そう言いながら紙のはしでサンダルをぬぐと、なんと、かべをすりぬけて入ってきた。
「だめだよ、お母さん！そこはかべなんだから」
　お姉ちゃんが注意すると、お母さんは、「え、え？」と言いながら後ずさりして、冷蔵庫の上で立ち止まってしまった。
「そこに立っちゃだめ！冷蔵庫なんだから」
　今度はわたしが言うと、
「あ、ごめん、ごめん」。
　あわてて横にずれたけど、今度はシンクの上。しかも、左足がちょうどじゃ口に乗っかっている。
　こうなると、もう何もかもめちゃくちゃだ。わたしたちの家は、たちまちもとの紙の絵にもどってしまった。
　お母さんは、ケラケラ笑っているけれど、わたしとお姉ちゃんは大きなため息をついた。
「あーあ」
　大人には、不思議なクレヨンがわからないんだ。

やぎ みいこ

53才　主婦　埼玉県

受賞のことば

　単調になりがちな毎日の中で、お話を作ることは私にとって楽しみであり喜びでもあります。今回、このような素晴らしい賞をいただけることになり、本当にうれしく思います。知らせを受けたときは恥ずかしながらもワンワン泣いてしまいました。今後もこれを励みに創作活動を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

審査員コメント

　お姉ちゃんのクレヨンで絵をかくと、何でも本物そっくりになります。画用紙のリンゴもバナナも。大きな白い紙にいくつも部屋をかいて、どんどん大きな家ができていきます。お姉ちゃんと「わたし」の会話ですすむ、ずいぶん楽しい童話になりました。

宮川 健郎